

福岡県立社会教育総合センター 北九州市立男女共同参画センター・ムーブ

大 島 ま な*

よろしくお願いします。九州は福岡から来ました大島といいます。私は二つの施設を福岡で担当していますが、きょうはムーブのほうを中心に話をさせていただきますね。ただもう一つのほうも簡単に説明しておきます。

1. 福岡県立社会教育総合センター

福岡県立社会教育総合センター、これは山里にあり、少年自然の家も併設しています。ですから、那須甲子と同じようなプログラムも行っています。ただ、県の生涯学習センター的な機能も果たしていますので、県民の学習活動支援や、それから社会教育の、福岡県内のいろいろな市町村の人材育成のための研修も行っています。子どもたちのキャンプ、集団宿泊体験活動も行っています。

実は当初、地域実習で、この施設で受け入れを考えたときには、西日本地区のそうした生涯学習や社会教育関係者、地域で様々な活動をしている方々が約500人ぐらい集まる大きな大会が年に1回あります。その事業運営に参加してもらいながら、その大会にも参加してもらおうと思い企画したんですが、残念ながらコロナで2年間中止になり、その大会での地域実習はできておりません。代替プログラムとして2年間、秋のゆずフェスティバルという行事に合わせて実施しています。今年もちょうど来週から始まります。

皆さま、冬至のゆず湯はご存じですか。冬至の寒くなる季節、かんきつ類のユズで邪気を払い、風邪をひかないようにしようと、冬至の時期、本格的な寒さを迎える前にゆず湯に入る習

慣があります。11月は少し早いのですが、少年自然の家の施設を地域の方々に開放します。先ほどの那須甲子青少年自然の家と同じように大浴場もあるので、そこに本来ならユズを浮かべ、地域の人に入っていただき、楽しんでもらいながら、いろいろな体験活動イベントをやるというフェスティバルです。それがコロナのために、日帰りイベントになりましたけれども、いろんな出し物、体験を用意して、親子連れの参加があるという、そうした時期に合わせて地域実習の学生に来てもらっています。

ただフェスティバルだけではなく、来週も小学校の団体が入っていますし、社会教育関係者の研修会もあるため、来た実習生はそれらの活動にも漏れなく関わってもらっていろいろな体験ができます。実習の最後がゆずフェスティバルで、子どもたちの火おこし体験やものづくり体験などのブースにも入ってもらうというプログラムを用意しています。

2. 北九州市立男女共同参画センター・ムーブ

本当は両方、詳しく話したいのですが、きょうはムーブのほうを中心に話します。こちらは今年7月に、ムーブフェスタというお祭りがあり、この期間に地域実習が無事に終了しましたので、そちらを中心に話をさせていただきます。

北九州市、どこにあるかご存じですか。アジアの玄関口のような所にあります。人口100万を少し切りますが、政令指定都市です。昔から交通の要衝地で、皆さんは歴史で、八幡製鉄所が明治期にでき、昭和の前半ごろまで工業地帯で栄えた所、ということをご存じだと思います。

*九州女子大学 人間科学部 教授

す。その伝統があり、ものづくりの町ともいわれています。ただ、この過程で公害問題なども起きましたが、それを克服して、今はSDGsの未来都市にも選定されるほどの、きれいな町を取り戻しています。

それと、フィルムコミッションについて聞いたことはありますか。映画のロケ等を行うのは、監督の方々は結構大変です。そこで、面倒な手続きや環境づくりなど全てのセッティングを引き受けるフィルムコミッション事務所が市役所内にあります。準備はこちらでしますから安心して北九州で撮影してください、とロケ地の誘致に力を入れて映画の町づくりも進めています。あるいは『銀河鉄道999』の松本零士さんの出身地ということもあり、漫画ミュージアムもあります。多くのマンガ家が輩出されていますので、そうしたポップカルチャーやメディア文化を核にした町づくりも現在行っている所です。

先ほど少し公害のことを申し上げましたが、昭和30年代ぐらい、高度経済成長期に、北九州はかなり汚れました。大気汚染も水質汚濁もひどく、洞海湾という海があるのですが、そこは「死の海」と言われるぐらい、ヘドロで大変な状況でした。いろいろな規制をまだ国も行っていない時代ですね。ただ、製鉄所の城下町ですから、工場労働者の男性はあまり苦情を言わなかったんですね。自分が勤めて、それで食べているわけですから。そのため母親たちが、婦人会の女性たちが子どもたちの健康被害を心配して立ち上がり、行政に働き掛け、企業に働き掛けました。その結果、何とかしないとイケないと行政も動き、企業が動き、改善していきました。そのときのスローガンが、「青空が欲しい」です。ドキュメンタリーフィルムもできています。

女性たちの取組みでは、中卒とか高卒の、当時それほど学歴が高くない方もたくさんいた婦人会の母親たちが、大学の専門家の先生にも相談し、学習しながら、科学的なデータを蓄積し、

そうしたデータを基に、行政、市長に訴えました。そうした企業と対立するのではなく、何とか改善してください、と訴えたんですね。データが人を動かした、ということが言われています。そうした女性たちの地道な学習と取組の力によって状況が改善され、改革が行われたという下地がある町であることを、念頭に置いていただきたいと思います。

今はすごくきれいな町になり、環境モデル都市にも選ばれています。反対に、そうしたエコビジネスなど、水や空気を浄化する技術を持った会社が結構あるため、それを東南アジアなどいろいろな所に輸出するなど、過去の辛い経験から得た成果を活かせるようにもなりました。ただ課題として、現在北九州市は政令市の中でも高齢化率がトップです。それに加え、ものづくりの町の気風が残っています。筋肉労働者が主体の九州男児ということで、やはり現場は男性優位の気風がまだまだ根強いという所でもあります。

そういう町にある北九州市立男女共同参画センター・ムーブですけれども、平成7年、1995年に設立されました。これがムーブのシンボルマークです。Mを形取っています。ムーブは、気持ちを動かす、「感動」のムーブということもありますし、「行動する」「飛躍する」という意味もあります。そのような思いが込められた、Mの字をシンボルにしたマークです。

ムーブの理念は、ジェンダー平等、女性・少女のエンパワーメントですね。ジェンダーというのは、皆さんご存じだとは思いますが、生物学的な性ではなく、社会的・文化的につくられた性をジェンダーといいます。そのジェンダー平等は、SDGs17の目標の5番目にも掲げられています。その運営方針について、簡単にざっと見ていきたいと思います。

一つ目、性別による固定的役割分担意識を解消するために、さまざまな啓発事



業を行っています。こうした講演会や映画祭のほか、『おとこのライフセミナー』も開催しています。このセミナーでは、夫婦共働き、なおかつご自分が病気をされた、ジャーナリストでアナウンサーの笠井さんが、ワークライフバランスと働き方改革ということでお話しされました。

それからムーブと言うと、女性ばかりが利用するところと思われるかもしれませんが、男女共同参画ですから、男性も女性も共に必要なことをやる、社会に参画していこう、と動いています。男性が今まであまり参加してこなかった分野で男性の学びを支援しようと、『介護男子』や『エプロン男子』という名前で講座も行っています。高齢社会ですし介護をしている人はたくさんいますが、介護従事者、家庭で親を見ている等、介護している人の3分の1は男性というのをご存じでしょうか。介護離職も増えています。『介護男子』『父と子の料理教室』、こうした男性向けの講座は非常に人気で、いつも定員以上の申し込みがあるそうです。

それから市民団体による男女共同参画活動への支援として、地域実習で学生が参加しているムーブフェスタがあります。こちらは市民が自主的に企画事業をいろいろ打ち出しています。実行委員会も市民を主体につくり、その実行委員会が今年どんなことをやるか決めている、そうした市民主体のお祭りです。ムーブが開所された7月に3週間程度、さまざまな催しを行っています。地域実習はこのフェスタの期間中、5日間を設定しています。オープニングイベントでは有名講師を招いたこのような講演会もありますが、主体は市民企画事業です。およそ90のさまざまな市民団体が、自分たちで3週間の間、ムーブの全館を使い、さまざまな催しを企画・実施しています。

令和4年、今年は96の事業で、参加者数は3万人を超えました。昨年はコロナでムーブフェスタも中止になったので、去年の地域実習は秋に代替プログラムを実施しました。今年、

地域実習では7名、うち1人は男子学生でした。ですから男女問わず興味があれば、どうぞ来てください。今年の実習5日間の中で学生たちが参加させていただいた幾つかの事業を紹介します。国際的な活動もさかんに行っているセンターなので、海外とつないだアジア女性会議も実施しています。そのイベントとして、オンラインで「モルドバに避難したウクライナの女性と子どもたち」というテーマで開催されました。モルドバというのはウクライナより少しルーマニア寄りに位置している小さな国ですが、そこでも避難民を受け入れています。その行政担当者などつないだオンライン会議を実施し、避難の実態と課題が報告されましたが、青学の学生にはそのバックアップをしてもらいました。それから、アフガニスタンから、タリバンの脅威から逃れ、ヨーロッパまで3年かけて逃避行した家族がスマホで撮影した動画をつないだドキュメンタリー映画『ミッドナイト・トラベラー』の上映会にも参加しました。よかったらネットで調べてみてください。

また、北九州婦人教育研究会の催しにも参加しました。先ほど北九州の女性たちの公害克服の話をしました。女性たちが学び合いながら、地域のさまざまな課題を解決していこうという血は、やはり脈々と流れているんですね。ですから、いろいろな研修に参加した女性たちがネットワークをつくり、こうした市民企画事業にも毎年取り組んでいます。今年は女性労働に関する講演会を企画されました。地域実習の青学の学生たちも一緒に講演会に参加し、会が終わった後、この婦人教育研究会と交流会も持って話し合いをして、若い人たちの意見が聴けたと非常に喜ばれました。学生たちも女性たちの熱い思いを直に感じたようで、これが一番印象深かったと言っていましたね。

それから、さまざまな分野での女性のエンパワーメントということで、キャリアアップ支援事業を行っています。これは若い世代のスキルアップ向上もありますし、管理職などリーダー

的な役割を果たしたいと思っている女性向けの講座もあります。それから、このような働く女性を応援するスキルアップ講座なども行っています。また講座終了後のネットワークづくりや交流も行っています。

若い世代は、あまりこういったところに来ないですね。皆さんはどうですか。自分たちの地元や周辺地域に男女共同参画センターのようなものがあるのはご存じですか。横浜も有名です。この実習に来た学生たちが、実習後の反省として、もっと自分の地元にあるセンターのことを研究してから来ればよかったと言っていました。ぜひ、よかったら周辺の施設を見てみてください。若い世代があまり関心を示さない、知らないということもあるので、ムーブでは大学に出前講義にも行っています。そのためのプログラムも開発して、高校生や大学生を対象に授業を行っています。

そして、リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖に関する健康と権利）という、女性が自分の健康や身体に関する意思を尊重されて、きちんと自分で管理できる、そういう権利に関するものや、健康維持のための講座も行っています。また、いろいろな相談事業ですね。これは電話、面談、メール、いろいろな方法があります。DVや離婚など、そういったことに関する相談も多くあります。男性からの相談もあります。それから1階ラウンジ横に、主にジェンダーに関するいろいろな種類の情報が蓄積された図書室があります。市民は自由に利用ができます。それから、ホームページやメルマガによる情報発信も行っています。

調査研究も行っています。いろいろな基礎データを蓄積しています。皆さんは性役割分担意識というのを聞いたことがあるかと思います。例えば男性は外で仕事、女性は家事育児というような、男性・女性ではっきり分けた役割分業意識というのは結構根強いかなと思います。北九州市の調査では、それに賛成しない、という人の方が多くなりました。そういう意識

はよろしくないんじゃないかという人が増えていることがデータで出ています。行政の審議会は皆さんご存じでしょうか。いろいろな行政部署の事業を運営していくために、市民からいろいろな意見を聞く委員会の制度があるのですが、そうした審議会は従来、男性のほうが委員の比率が高く、女性は少数しか入っていないということがずっと続いてきました。しかし、北九州市では女性の委員が5割を超えたということがデータで示されています。

それから情報誌も発行しています。また施設の管理運営面として、いろいろな事業を実施するときに、託児サービスも行ってます。コロナ前は年間、およそ20万人を超える人が参加していたのですが、コロナ感染が拡大して一時期閉鎖もしていたので、令和2年度と3年度は少し減りましたが、令和2年8月末で累計700万人が利用している施設です。このムーブも小倉城の近くにある便利な所ですが、そこから少し離れた場所に、小倉駅の近くにウーマンワークカフェという場を設けています。これは国と福岡県と北九州市が一体になって女性のサポートをする施設です。ここに行けば何か助けてもらえるというところです。ウーマンワークカフェにも地域実習で視察に連れて行っていただき、そこに視察に行ったついでに小倉城や門司港レトロ地区など、周辺のちょっとした観光地も職員のご好意で案内して下さったようです。

ムーブでのこれまでの地域実習の特色として、最初にお題が出されます。地域実習を通して、こういうことを考えていってください、最終日には考えたことを発表してください、ということで、最終日にはプレゼンがあります。今年のお題は、ムーブをどういう人たちが利用しているのかを観察しながら、確かに熟年世代が多いとか、若い人が少ないというのも実感すると思いますので、「より多くの方が、若い人も関心を持ち参加したいと思わせるような広報を、若い学生が目線で提案してください。」というものでした。

最終日に、事前学習も含めて、実習中に学んだことを生かし、今年は7人を2グループに分けて発表してもらいました。SNS活用や、動画作成の提案をしてくれました。ムーブを「見える化」するための試作の作品も作ってくれました。提案では、若い人にとって、これまでの広報は少し「堅い」と言うんですね。パッと見て分かる動画を作ったほうがいいということで、自分たちで「こんなイメージです」というものを作ってくれたので、それを最後にお見せしたいと思います。短い時間、1日か2日で作ったものなので本当に短い動画ですが、イメージはつかめると思います。

(映像と軽快な音楽：ムーブの正面玄関でスタッフがにこやかに出迎え⇒市民企画事業の準備風景⇒実習生の話し合い・作業風景⇒ムーブの外観とシンボルマークの表示)

これは一つのグループです。フェスタで市民の方が運営されている事業の一場面です。これ、青学生の作品です。いかがでしょうか。

もう一つのグループが作ったのがこちらです。

(映像と躍動的な音楽：ムーブ前バス停から入館⇒1階ラウンジ風景⇒2階ホール⇒3階事務室・会議室を歩いて辿っていく映像を早送りしたもの)

これは図書室ですね。ここが1階ラウンジです。

これが、学生たちがプレゼンの準備作業をしていた部屋です。言葉ではなく映像でムーブのイメージが分かるようなものを学生たちの目線で提案しようと。もちろん、この映像を見せるだけでなく、プレゼンのスライドも作りました。こういうことが要因で、あまり人が来ないんじゃないか、若い人があまり来ないんじゃないかという要因分析をして、そのため対処策

は、こういうふうなことが考えられる、そしてこの中から、自分たちが今すぐできるのはこれだ、という実行計画を立てるというような方法論でまとめていきました。そのプロセスでは、最後のプレゼンに向けて、私も一緒に入ってグループワークをしました。ムーブの職員にも助言していただきました。しかし最後は、学生の力ですね。

あとは質問を、お受けしたいと思います。ありがとうございます。

後藤 ありがとうございます。

では、実習地である北九州の男女共同参画センター・ムーブのほうを中心にお話していただきました。どういう課題を、最後に、学生たちが取り組んでいるのかという具体的な映像を見せていただいたので、イメージも持ちやすかったと思うのですが、この実習地や活動について質問がある方はいませんか。

Aー 本日は遠路はるばるお越いただきまして、有意義なお話をありがとうございました。先ほどいただいた那須甲子の事例も鑑みながら、一つ疑問を、質問をさせていただきたいなと思います。極論を申し上げて大変恐縮なんですけど、学生がいなくてもそういう場って成り立つと思います。学生って、私たち、大学生がいなくても、そういう場は成立するし、参加者の皆さまに有意義な学びを届けるっていうムーブは、大学生はその場には、もしかしたら要らないかもしれないんですけど。その中で大学生がその場に参加する意義というか、大学生がなぜその場に参加する意義があるかっていうのを、お話していただきたいなというふうに思います。申し訳ございません、抽象的な質問で。お願いします。

はい。若い人は必要とされています。

想像してみてください。50代以上ぐらいの女性、あなたたちからしたら、お母さんとかおばあちゃん世代の女性がメインで集まって話し合

いをしているとします。やはり、人間って自分の経験を基に発想しますから、自分たちの生きてきた時代、生活圏域のことで物事を考えます。だから、そのメンバーだけで考えてもそこから広がらないっていうことがあります。そこに大学生が入っていろいろな意見を言ってくれど、そんなこと思いも付かなかった、そういう考え方があるのね、っていうことで非常に刺激を受けて、世界が広がるんですね。それは大学生も同じです。先ほど婦人教育研究会の人たちとお話が最も学生の印象に残ったと言っていたのは、やはり学生たちは、サークルやバイトなど、自分の生活が中心です。けれど、こういう女性の人生があるんだとか、こういう活動の中でこんなことを考えてる人たちがいるんだとか、同じ日本にこういう思いをしてる人たちがいるんだということで、ものすごく刺激を受けているんですね。

だから、大学生とか若い人たち、そういった人たちの目線や、あなたたちが問題意識を持ってきてくれることがとても大事だと思います。まだ2回しか実施していませんが、もっとこういうことを調べてくればよかったという反省が1年目にもあったので、それを2年目の学生には事前に伝えていました。1年目の学生がもう少しこういうことをやってきたらよかったと言ってたから、あなたたちには伝えるね、と。そのため1年目よりは、いろいろなことを事前学習で調べたと思いますが、それでもやはり、行ってこそ視点が広がるっていうこともあるので、それが体験学習の良いところだと思います。だから、学生がいなくてもそれは動いていくとは思いますが、全然、発想の広がり方が違うと思います。だからこそ、青学生の参加はすごく喜ばれていました。また来てくださっておっしゃっていました。

それと、若い世代はあまりこういうことを考えてないかもしれないけれども、ムーブに来ていろんなことを体験し考えた若者たちが、その

あと自分たちの場所で、何か種をまいてほしいとかですね、その人たちがムーブや男女共同参画推進活動の応援団になってほしいという願いがあると思います。若い人たちがそうやって育っていく、引き継いでいくといったことも、もちろん期待していると思います。

後藤 他には、いかがでしょうか。

B- 学生たちに配る実習地の説明には福岡県立社会教育総合センターとムーブの二つが書いてありますが、これはどちらの場所でも実習するのですか。

2カ所で実施していますが、学生はどちらか一つで実習します。最初の年は、8人を3人・5人で分けました。今年は、最初は4人・4人で分かれていたのですが、社会教育総合センターの実習が代替プログラムとなって11月に変更されたことにより、後期から留学する予定の学生や、秋に部活の試合がある学生がやむなくムーブのほうに移動した、ということがありました。おおむね、自分たちの興味関心によって、2年次に事前学習もしているので、それを基に、どちらか1つを選んで分かります。

B- では、その8人が二つに分かれて、どちらかを選んで実習する。

はい。今まではそうしました。

B- ありがとうございます。

後藤 他に、大丈夫でしょうか。はい、では。ありがとうございました。

大島 ありがとうございます。



ムーブ 地域実習 プレゼン風景



北九州市立男女共同参画センター・ムーブ